

いわての

# 風

皆さまがこの記事を目にされる時間には、雨天でなければ、筆者は本日の早朝清掃を終えているかと思えます。

春から秋まで毎月第1日曜日の早朝に実家の町内会が主催する定期清掃で、筆者もここ数年皆勤しています。

というのも、集会所の清掃や駅前ロータリー花壇・駐輪場の除草はもちろんです。集会所に隣接する実家の草むしりまで町内会の皆さまがしてくれるからです。

実家から離ればかりの筆者は、町内会の皆さまに高齢の両親を長い間見守っていたなどのご恩があったので、集会所の用地を無償提供しているのですが、逆にそのことに対して、町内会の皆さまのご厚意なのです。

第1日曜日の月1度だけではありますが、つくづく人の情けを感じる町内会の風土の中で「おかげさま」の気持ちをかみしめるのです。

さて、本業である経営支援においても企業にはそれぞれ

関洋一(一関市・企業世話人)



風土があり、労使関係が良好な会社もあれば、ギクシヤクして険悪な会社もあります。

せき・よついち 1952年生まれ。東京理科大学。商社完全歩合制販社勤務、誘致企業取締役、県中小企業支援センターPMなどを経て現在は中小企業大学校講師、岩手大学客員教授、盛岡市企業支援マネージャーなど。著書に「一倉定」社長学」実践「Sフレーム」のすすめ」

……

たり弱い気持ちに揺れたりすることもありますが、その都度「おかげさま」がそれを退治してくれます。

心理学の専門的なことは置きますが、こうした人間の弱さや不完全性を、まず素のまま「受け入れる」、そして「認める」、さらに「共感・共有」することで、人間らしい「おかげさま」の気持ちが湧いてくるようです。

その結果、殺伐とした関係は解消され円滑な人間関係になるのではないのでしょうか。もちろん企業でも、所属するヒトの持味はさまざまです。それぞれに得意もあれば、不得手もあります。それを補い合ってこそその組織ですから、決して角突き合わせて争ってはいけません。一堂に会している意味がなくなりません。

人間はヒトの間で生きるも

……

どこの政治家が「信なくば、立たず」と頻繁に口にしますが、空虚な言葉で強弁することなく、正直に穏やかに自分の弱さも他人の不完全性も受け入れることで、「おかげさま」の気持ちが醸成されるのではないのでしょうか。ここにこそ、計算高い忖度など無縁の、本物の信頼感が生まれると考えるのは筆者だけでしょうか。

企業活動を表現する言葉で「売り手よし、買い手よし、世間よし。三方よし」という言い回しがありますが、いわば事業経営を進める際には、お客さま・働き手・地域に感謝し「おかげさま」精神で当たりなさいという教えです。こうした構えの企業はどちらも繁盛していますし、こんな生き方をした先人は人生を全うできるようですから、社会人としても家庭人としても心したいものです。

## 互いを認め生む信頼

この分かれ目は、経営者および社員がお互いを思いやる余裕があるかどうかにかかっているのですが、かつて先達は「企業内の問題は、業績さえ順調であれば、95%解決する」と指摘しました。筆者も同感で、円滑な企業活動への特効薬は、好業績に優るものはないと感じます。

ところで、古くからの「性善説・性悪説」という考え方に、最近「性弱説」という観点が加わったようです。

筆者流にこれを解釈すると、「100パーセント完璧な聖人君子のような人間も、全く救いようのない極悪人も、どちらもない。すべての人間

は、聖人君子と極悪人の間で行ったり来たりしている。その振れ幅はその時々による。それは人間の弱さによるものともいえよう」というようなところでしょうか。

家族はじめ身の回りの人、仕事上の仲間、マスコミで取り上げられる立場の人たち、どなたを観察してもあてはまるように思います。

それなりの立場の方々の不祥事や非道な事件も、普通のヒトが極悪人モードに近い状態の時に起こすようです。かくいう筆者自身も、自宅から100%弱離れた実家の早朝清掃への参加に気後れし